

植

物に対して、ぼくはずっと冷淡だった。小学生のとき、理科の学習や購読していた雑誌の付録などで植物を育てざるを得なくなることがあるが、どれもあつという間に枯れた。

長じて学校の教員になったときも、教室に飾られた花にまったく興味がなく、花係の子どもがぼくと同種だった場合、気がつくとも見る影もなく茶色くしおれているのだった。保護者からプレゼントされた盆栽もどうしてよいかわからず、水もやらずに放置していた。枯死寸前で校長に見つかり、こつぴどく叱られた。叱っただけではダメだと見抜いた校長は、盆栽を校長室に持つてくるように言い、二度と教室に戻されることはなかったのだが、今考えても校長の判断は正しいのだ。似たようなことは、その後も何度かあった。別の校長にも叱られた。「命を大切にすることなのだ」と説かれると、その通りだと思う。贈られれば贈り主の真心なりメッセージが込められているのだと思う。しかしそれも一時で、すぐに関心が薄れ、見れども見えずの状態になり、またぞろ植物の悲惨な末路を目にするようになる。興味がないというのは、残酷だ。散々非道を重ねてそのことに気づいてからは、自分が育てる状況になることを極力避けた。教室では、よほど使命感とやる気を持った児童がいない限り、花

係は置かなかった。

父は盆栽の鉢をいくつも並べて常に構っていたし、母は小さな庭にあれこれ植えて育てるのを楽しんでいた。ぼくがまったく関心がないことを二人とも知っていたので、親子の間で植物を話題にすることは皆無だった。両親が亡くなって、二人が育てていた庭木も鉢植えもすべて処分してコンクリートを敷き、草も生えぬようにしたのだが、皮肉なものでそのころから植物とのコミュニケーションに関心が向くようになった。きつかけは特にならない。殺風景を嫌って置いた鉢植え、料理に使おうと試みに買ったハーブ苗、無償で提供してもらった畑の作物たち、自分から植物に関わることが続いたせいかもしれない。

Mさんの畑には、野菜だけでなく花もある。「あんたんとこ仏さんあーかね。墓の花、買わんでもいいけんね。ここにあーやつ持つて行きな。」

そう言つてMさんは、咲き始めた菊を何色か選んで束にし新聞紙に包んでくれた。摘み取るときの眼差しが笑みを含んで温かい。

「こうして、育てた野菜や花をかまっちゃうとほんとに楽しい。」

通い合っているという手応えが暮らしを彩る。植物相手にそんな関係性を作れたら、確かに幸せだ。



専業ババ奮闘記 (その2) 117

木幡智恵美

秋 (6)

十月の後半、ようやく息子が第一回目のワクチン接種を受けた。ところが、夜熱を測ると三十七度五分あり、「二回目はやめる」などと言っている。コロナ感染者は、オリンピック後に拡大したが、県内では九月の半ばごろから落ち着き、稀に二けたにはなるものの、大概一けたかゼロに落ち着いている。このまま収束してくればいいのだが。

続いていた残暑も、十月後半になると気温がぐつと下がり、慌てて居間に炬燵を出した。寒さ対策を終え、散歩に出かけると、途中ズボンのポケットに振動があり、携帯電話を取り出すと、夫からだ。宗矢が熱を出したので保育園に迎えに行ってくれと娘から連絡が入ったとのこと。一人では不安だからついてきてくれというので、近くにある店に寄つて拾つてもらつて保育園に向かった。真っ赤なほつぺの宗矢が先生に抱かれ、笑顔で両手を差し出した。五時前に娘が寄り、小児科へ連れて行く。明日は宗矢の子守だ。

翌朝、昼食の準備まで済ませて玉湯に向かう。寛大を送り出し、娘は実歩を乗せて保育園と職場へ、私は宗矢を乗せて我が家へ。家に着くと、宗矢はピンポンを押してにこつと笑う。寛大も来る度にピンポンを押していた。することが寛大とよく似ている。コンセントに始まり、テレビ、ラジカセ、受話器など、電気製品をよく構う。葉が効いているのか機嫌はよく、ラジカセでCDを聞いたり、お絵かきをしたり、絵本を読んだり、型はめをしたり。その間、「ぼぼ」と呼び、絵本の絵を指して、「わんわん」「ぶーぶー」「はっば」などと言う。「あつち」と指さして移動したり、歌を歌うと語尾の「ねー」など歌つたりもする。熱が上がりなくて安心したけれど、食欲は今一つ。口の中の方を何度かいじっていたし、涎がいつもより余計出るので、口内に何か出来ていて、それで食べにくいかもしれない。

夜も熱は上がらず、翌日は保育園に通園した。次の日は土曜日。玉湯に行くのと、宗矢はすっかり元気になっていた。この日は寛大の参観日で実歩と宗矢でお留守番。娘と寛大が帰ってきて、皆で昼食を摂り、宗矢を寝せた後は、寛大と実歩とで油粘土。寛大の粘土作品を見て、実歩もやりたがったのだ。高齢者の私も、童心に返り、懸命に粘土をこねていた。

30代フリーター やあ、ジイさん。安倍晋三の国葬について朝日新聞の政治部長が「国民の幅広い合意を得られず、分断を招いてしまった」と書いていた（9月28日朝刊）。

年金生活者 国葬が「分断を招いてしまった」のではなく、すでに存在していた「分断」が国葬の強行によってあらわになったと言ったほうがいい。

すでに存在していた「分断」とは「安倍のなもの」と「非安倍のものの」との対立を指す。「安倍のものの」とはアベノミクスでもなければ、「地球儀を俯瞰する外交」でもなく、集団的自衛権の行使を容認する「積極的平和主義」でもない。岸田文雄が当時の首相だったとしてもそれに近いことをしたかもしれない。

「安倍のものの」の核心は経済・外交・安保といった国政の根幹にかかわるところにはなく、家族およびその土台をなす性をめぐるイデオロギーに存在している。選択的夫婦別姓も、同性婚も認めず、LGBTへの差別の規制

義の対立は消滅し、前者は小さな政府路線に、後者は大きな政府路線に形を変えて、経済情勢に応じて交替する補完的な関係に変わった。

それに代わるものとして21世紀の主要な対立のひとつとなったのが、家族とその土台をなす性をめぐる対立だ。かつては資本主義を支持する勢力の中にも、社会主義を支持する勢力の中にも、ともに家長制的なイデオロギーが残っていた。そのため、「分断」の生じる余地がなかった。高度化した資本主義が富の稀少性の縮減を加速した結果、先進諸国で選択的消費が消費支出の過半を占めるようになり、諸個人がその豊かさに相応する処遇を求めるようになった。それは女性やマイノリティーも例外ではなかった。それが家族と性の自由を求めるトレンドを形成した。

30代 対立の新旧交代が起きたのか。年金 歴史は対立を不可避とする。というよりも、対立がなければ歴史もない。対立は人間が言葉を獲得して初め

にも消極的なのがこのイデオロギーの特徴だ。こうした家族および性を縛る家長制的なイデオロギーと、家族および性の自由を主張するイデオロギーとの対立はアメリカでも「分断」の核心をなしている。

家長制的なイデオロギーは安倍ら自民党内の右派議員を特徴づけるものであり、彼らとの結びつきが表面化した統一教会の主張と一致する。国葬があらわにした「分断」は「統一教会的のもの」と「非統一教会的のもの」との「分断」と言ってもいい。

30代 国民の多くは、安倍ら自民党内の右派と統一教会のイデオロギーが一致していることをはつきりとは知らないのではないか。

年金 彼らの主張が家族や性をめぐる自由な選択を尊重する現在のトレンドに逆行することは感じていないはずだ。そんなものに縛られたくないという気分が、それと意識されることなく国葬への反対につながっていったと推定することができる。

て生まれた。言葉は現実の代替であり、それは現実を否定することによって成立した。否定は言葉に固有の機能であり、対立を生じさせる条件だ。

対立は新旧のせめぎ合いとして進行する。今ある現実を否定するのが人間であり、それを恐れるのも人間だからだ。自由を求めてやまないのに、自由

30代 かつては「分断」ではなく「対立」という言葉が使われた。

年金 よりラジカルな響きのある「分断」が使われるようになったのは「対立」の主要なテーマが経済や外交・安保などから家族および性に移ったからだ。家族と性は政治や経済よりも人間の心の奥深いところにかかわっており、その深さが「分断」という言い方に込められている。

30代 20世紀の大きな対立は資本主義と社会主義の対立だった。年金 柄谷行人の交換様式論に従うなら、前者は交換様式C（市場での商品交換）が支配的な社会のシステムであり、後者は交換様式B（国家による略取と再分配）が支配的な社会のシステムに相当する。

近代的なCに対して、Bは前近代的な社会の基盤をなした交換様式であり、ソ連はそれを「社会主義」と称して採用した。その後進性は東西冷戦での東側陣営の敗北によってあらわになった。その結果、資本主義と社会主

を恐れる。その自由は言葉の否定する機能によって成立した概念だ。

否定の対象となる現実には対立も含まれる。時間の経過とともに対立そのものが否定され、同時にその反動が生じる。そのせめぎ合いの果てに、両者は補完的な関係に移行し、対立は消滅する。そして新たな対立に取って代わられる。「共産党宣言」（マルクス+エンゲルス）はそれを「階級闘争の歴史」という言葉で言い表した。けれど、いま私たちはこの社会に「格差」を見ることはできても、「階級闘争」の姿を見ることはできない。

選択的消費が必需的消費と肩を並べようになった先進諸国の「豊かさ」が「階級闘争」という「対立」の形式を古いものにした。「階級闘争」は稀少な富を奪いあう戦いだった。資本主義の高度化が富の稀少性を縮減させ、その戦いを終わらせた。それは格差の消滅を意味しない。格差が生死を分けるほど過酷なものではなくなったということだ。

ニュース日記 849
中村 礼治

何をめぐる「分断」か